

「私たちの切実」

「戦争に負けた時には焼け野原であった国が、わずかなうちに世界の中で一番経済的に安定した国になった。治安も日本ほどいいところはない。どなたのお陰かといえば、残念ながら宗教者ではなく政治家のお陰なんです」

「我々はいまあまりに幸せすぎて、政治なんて関係ないと、宗教家は朝から線香立てて、ろうそくつけて拜んでいればいいというが、そんなことはない。憲法の根底は主権在民。我々が権利を持つているんです。我々が立派な政治家を選ばなければ、いい政治になどならんのです」

一九八〇（昭和五十五）年の創立記念日の式典で、庭野開祖はこう述べています。私たちはこの言葉の重大さによく気づくことができました。

これから、私たちは参議院議員選挙を迎えます。この選挙は、これまでとは違います。私たちが、日本という国のあり方を決定する、歴史的選択となるのです。

私たち日本人は、先の大戦で「剣をとって起（た）つ者は剣によって滅びる」という人類普遍の真理を学びました。犠牲となられた

多くの人々は、その尊いのちと引き換えに、私たちに、「国民主権」
「基本的人権の尊重」「平和主義」という精神に立つ日本国憲法を
遺してくださいました。戦後の歴代政権はその精神を尊重し、日本を
平和と繁栄に導いてきたのです。ところがいま、その根幹が崩れよう
としています。

今年の「安全保障関連法」の強行採決によって、憲法を守るべき時
の政権が恣意的に解釈を変更できる、という既成事実が生まれまし
た。「あの日」、私たちは気がつかないうちに大切なものを失ってしま
いました。それは信頼に基づく民主主義です。

例えば、すでにメディアは以前のように多様な意見を紹介する
ことに困難を感じているようです。「国境なき記者団」によるランキ
ングで、六年前に十一位であった日本の報道の自由度は、現在七十二
位に転落してしまいました。

こうした事態を招いてしまった原因は、残念ながら私たち自身に
もありません。生活の安定に心を奪われ、政治や社会が変化している
ことに気づくことができなかつたのです。

今、私たちは危機感をもっています。

この選挙において、私たち一人ひとりが行う選択（投票）は、子ども

もが、孫が、そして今を生きる私たち自身が、どんな国に生きるのかを決定づけます。取り返しがつかない、まさに「切実」な日となります。いま一度、「信頼」できる政治を取り戻すために、私たちは主権者として、仏教徒として、この選挙に真摯に臨んで参ります。

日本では古来、「和を以って貴しと為す」の精神を基に、大和（だいわ）の国を築いてきました。これからの日本の国のあり方が、私たち一人ひとりの選択によって決まるのです。

平成二十八年六月二十一日

立正佼成会